

1. 運命に出会う

王都の城下町でひっそりと切り盛りし、けれどご近所の皆さんから愛されているパン屋。一階は店舗と厨房があり、二階は住居となっているこぢんまりとしたお店だ。

週五日は朝から夕方まで、店頭に美味しいパンを並べてお客さんを待っている。

そんな下町のパン屋で生まれ育った私は、店主である父とオーナーである母の手伝いを子供の頃からしていた。

今年で二十二歳になる現在でもそれは変わらず、週二日の休みを除いて、早起きをして仕込みを手伝う毎日だ。

また、子供の頃とは違って新商品の開発にも携わっており、厳しい父から『良』の判定を貰い、実際に販売に漕ぎ着けた商品もある。

そんなこんなで忙しくも充実した日々を送っているのだが——年頃の私にはいくつか悩みがあった。

母からそれとなーく度々、婿となってくれそうな人はいないのかと探られるのだ。

そんな相手はいないし、私は一人でも家業を継ぐつもりである。

けれど母と、それから父は——少々引っ込み思案のきらいがある私が一人で店を継ぐのを、とても心配していた。

それでも相手がいないものはいないのだし、どうにか一人でも大丈夫だと安心させたい。

何より私は、昔からちよつと……男性が苦手で。

追い掛け回されたり後をつけられたり知らない人に抱き着かれたりと、とにかく異性とのエピソードで良いものがないのだ。

だから出来れば、ずっと独り身でいたい。

だがそうは言っても、親としては孫の顔が見たいだろうし。それにそもそも、両親から店を引き継いだ後、私一人で店を切り盛りすることは難しいだろう。

出来たとしても、過労で倒れる未来が見える。そして何より、二人も心配で老後の余暇を楽しむことなどできないはずだ。

そうなると思いの従業員が必要になるし——と。

なかなか悩みは尽きなかった。

恋愛結婚で仲の良い両親を見ていると、いいなと思う。

結婚や恋愛への憧れが無いわけじゃないけれど——

どこかにいい人転がっていないかなあと思うこと、早十数年。

この歳になると『いい人』は大体売り切れているし、私はやっぱり変な人にばかり好かれるし。独り身でもいいですと虚勢でも張っていないと、やってらんないのだ。

そろそろ夏が来るといふ頃。

本日は定休日。ストレス発散を兼ねて街をブラついていた私は、用事を済ませて鼻歌交じりに帰路へ着いていた。

上機嫌の理由は、いい買い物が出来たから。先ほど寄った馴染みの青果店で、仕入先で大量にアプリコットが収穫されたと聞いて、それをいち早く買い付けたのだ。

後日配送されるそれを、どう活用しようかと今から楽しみでならない。

ジャムにして瓶に詰めて販売してもいいし、そのジャムをサククリと焼いたパイに塗って販売してもいい。

去年もこの時期に、スイーツ系のパンのラインナップをアプリコット尽くしにした。するとよく足を運んでくださる常連さん方が、

大絶賛してくれたのだ。

旬の時期を過ぎてアプリコット自体が仕入れられなくなり、販売が終わったなら残念がられすらした。

きつと皆、復刻を喜んでくれることだろう。

（そうね、去年作ったのレシピの内から良い出来だったものを数点復刻として、あと何品かは新商品として開発を――）

ウキウキと浮かれて歩いていたのが悪かったのだろう。注意力散漫で歩く私は、正面からドンツと人にぶつかってしまった。

ぼふりと顔が黒い布に埋もれる。ふわりと鼻腔を擦るのは爽やかな石鹸のような香りと、薬草のような独特な匂い。

「……っ」

「あっ、ごめんなさい……!!」

弾き飛ばされそうになった私の体を、その人は咄嗟に腕を掴んで

支えてくれた。しかし謝罪の言葉を口にして、続けて感謝を告げようと顔を上げれば。思いの外顔が近くにあることに気が付いた。

「あ……」

チラリとこちらを見た瞳と目が合う。

真ん丸になったその瞳は、銀色のような、グレーのような絶妙な色合いをしていた。

光の反射がキラリとその目が光り、私は首を傾げる。

けれど視界に映る世界の角度が変わったことで——その人の目鼻立ち鼻や輪郭など、顔の全容が目に入った。

目尻の吊り上がった三白眼と、高い鼻。薄い唇。しゅつとした顎。

——男性だ。

（ひ……っ！）

かろうじて悲鳴は飲み込んだが、ぶるりと体が震えてしまった。

ジッとこちらを見下ろす瞳が、何故だか更に見張られていく。

(こ、こわい……っ)

すごく背が高く、すごく目付きが鋭い。

フードを被っていて、顔に影が差しているのもこれまたこわい。

影になっていて光りなど差すわけがないのだから、さっき目が光ったように見えたのは気のせいか——などと一瞬過ったのは、混乱しているが故の現実逃避だろう。

チラリと見やれば、未だに私の右腕を掴んで支えてくれている手は、とつても大きかった。私の首を掴めば簡単にゴキリと出来そうなほどに、大きかった。

「……、……」

じいっと、見られている。ただひたすらに、ジッと。まん丸お目目が穴が開くほどに、私のことを凝視している。

「あ、あの……？」

手を離してもらえることも、話しかけられることもないから。つい怯えながらも、私は声をかけてしまった。

また変な人に気に入られたんじゃないや、と不安が過って、流石にそう決め付けては失礼だと思考を振り払う。

「……あ」

「あ……？」

微かに漏れ出た声に、首を傾げて問い返す。

私に触れている手は、今や小刻みに震えていた。

ジリジリと足元から這い上がる恐怖心。

やっぱり変態さんじゃ。いいやきつと違うのよ。と、小さな私が二人、頭上でガヤガヤと騒ぐ。

「いえ、失礼」

「あ、はい……」

正気を取り戻したのだろうか。男性は静かに後退するとすぐにペコリとお辞儀をして、クルリと踵を返した。

着ている服の裾をはためかせながら颯爽と去って行く、不思議な男の人。その後ろ姿をぼんやりと見つめながら、私は首を傾げた。

（……魔術師さん？）

フード付きの、全身をスッポリと覆う黒い上着。街中でたまに見かけるそれは、大体が魔術師の制服だ。

そういえば顔を埋めてしまった布地は、サラリとしていて上質そうだった。

だからもしかしたら、お城勤めの方かもしれないなあと考えながら。私もまた歩き出した。

2. 邪魔者

その男性に再会したのは、意外にもすぐのことだった。

あれから一週間が経った今日。昼過ぎのお客さんが少ない時間帯にぼんやりと店番をしていると、その人はやってきたのだ。

「あ……、いらっしやいませ」

頬杖をついていたカウンターから手を下ろし、椅子から立ち上がって。笑って来店を歓迎すれば、こちらを見ていたグレーの瞳がスツと逸らされた。

普段なら臆して目も合わせられないだろうが、仕事中の私は無敵だ。どんな怖そうな相手にも、笑顔を振り撒ける。

（そっかあ、黒髪だったんだ）

そういえばこないだは、フードの影でよく見えなかった——のと、

私が盛大にビビりちらかしていたので、気付かなかったのだが。どうやら彼は、少し癖のある黒髪をしているようだ。

「おすすめは、ありますか」

被っていたフードを下ろしながら、真っ直ぐこちらまで歩いてきて。どこかぶっきらぼうな様子で問いかけてきた推定魔術師さん。

私は未だに目を逸らしている彼にニコリと笑いかけて、商品棚を手で指し示した。

「甘いものが苦手ではないのなら、是非こちらの新商品をどうぞ。旬のアプリコットで作ったジャムをふんだんに使っております」

「……じゃあ、それにします」

清潔さが維持されるように魔法が施されたトングで、お客さんがパン取り籠に数種類のパンをひよいひよいと乗せていく。

何だか落ち着かない様子を見るに、人見知りなのだろうか。

だとしたら親近感が湧くなど、私はほっこりとした。

使用済みのトングとパンの入った籠を手にも、お客さんがこちらに歩いてくる。

やっぱり、背が高い。私は高い位置にある顔を見上げながら、引けそうになった腰に力を入れた。仕事の中に、素に戻ってはいけない。
(ちよつと……やりづらいな)

会計を済ませ、紙袋に商品を詰めているその様子を——じいっと、観察されている。

慎重に商品を扱う手元に、口元、目元。そしてまた手元へと、彼の視線が移動する。

もしかしたら何か言いたいことでもあるのかな、と顔を見上げると、慌てて逸らされる視線。

(ふふ、やっぱり人見知りなのかな)

やりづらさはあるものの、不思議と不快感はなかった。

きっと年上だろうけれど、なんだかいじらしいなと感じてしまう。

「よかったら、またいらしてくださいね」

「……ん」

お客さんに包み終わった商品を渡しながらそう声をかければ、彼は目を細めてコクリと頷いた。

そして大事そうにパンを入れた紙袋を抱えて、帰っていく。

（最初に怖がって、悪いことしちゃったかな）

体の大きさと目付きの悪さで盛大に恐れてしまったことを、今では後悔していた。

人は見かけによらないと言うし、本当は物静かで優しい人なのかも。そう思った私は、微かに口許を綻ばせた。

パン、美味しいと思ってくれたら嬉しいなあ。

あれからというものの、例のお客さんは度々店に足を運んでくれていた。

人が少ない時間帯が好きなのか、毎回私一人の時にやってきて。そして毎回、私におすすみを聞く。それから大体、三つくらいパンを買っていつてくれるのだ。

「こんにちは、お嬢さん。何かおすすめはありますか？」

今日も店内に私一人のタイミングで入り口のドアベルが鳴ったから。彼かなと思い、私は顔を上げたのだ。

「ええ、と……」

そうしたらそこには、予想外にもやたらとキラキラしい顔があった。私はとっても、驚いてしまった。

スタスタとまっすぐこちらに歩いてきたその男性は、カウンター

の前に立ってニコニコと笑い、私のことを見下ろしている。

輝く金髪に、淡い青の瞳。女性受けの良さそうな顔立ちと、スラリと手足が長いスタイルの良さ。

若く見えるが——こういった美形は実年齢よりかなり若く見える。だから恐らく、年は三十手前だろうか。

ほんのりと醸し出される、大人の色気を感じる。

そんな人に笑いかけられて、私の緊張と警戒心が同時に膨れ上がっていった。

「……あれ？怖がらせちゃいました？すみません、悪意はないんですよ」

「あ……っ！い、いえっ！失礼しました。その、おすすめはですね……」

ハッと我に返った私は、カウンターの奥から商品棚の傍へと移動

する。そしてあの背が高く、無口なお客さんが初めて来てくれた時と同様に、プラム尽くしのパン達を勧めた。

「今のイチバン人気はこちらです。刻んだプラムのコンポートがサクサクとしたパイの上に乗っていて、パイは真ん中でカスタードクリームを挟んでいます。甘味と酸味があって、とっても美味しいですよ。でもそろそろ、プラムの在庫が無くなるので……今、試しておかないと来年まで食べられないかもしれません」

ちよつと宣伝文句が過ぎるかな、と僅かに不安に思いながらもチラリと顔を見上げる。すると、お客さんはパイを見つめてゴクリと喉を鳴らしていた。

「美味しそうですね。ではこちらにします」

「はい、是非そうしてみてください」

甘いものが好きなのかな、と私が微笑ましく思っていると。お客

さんはほんのりと目元を赤らめて、照れ臭そうに笑った。

男性は甘いものが好きなことを恥じらう傾向があると聞いたことがあるし、そうなのかもしれない。

私は深く追及することとはせずに、こちらからもにつこりと笑い返した。するとお客さんの口元が、ムニムニとむず痒そうに動く。

「アイツ、いい子に目を付けたなあ……。くう、先にこっちが出会っていれば……」

「……?」

なんの話? と首を傾げると、お客さんは少し困ったように笑って、いいえと答えた。それから、すぐ傍にあるパン取り籠とトングを手取る。

一個、二個、三個。悩みながらもパンを籠に取り、それでもあちこちに目移りしている。

やっぱり、甘いものが好きみたい。

三つ取ってからもちこちに視線を移していたから、きつとまだ気になるパンがあつたのだろう。

それでも食べ過ぎを懸念してからか、お客様は名残惜しそうにしながらも、籠をこちらに渡してくれた。

「プラムを使ったものはもうすぐなくなっちゃいますけど、他のパ
ンもとっても美味しいので。是非またの機会に、試してみてくださいさ
いね」

「……ええ。そう、します……」

私や両親が丹精込めて作った商品を、気に入ってもらえたことが嬉しくて、たまらなくて。顔を見上げたままにつこりと笑いかけて首を右に倒すと、お客さんはほほほと頬を赤くしてぼんやりとこちらを見下ろした。

意外と、照れ屋なのかもしれない。

私はカウンターに戻って、お会計の準備をする。

お客さんは私の後を追いかけてきて、じっとこちらを見下ろしていた。

「はい、丁度をいただきました。お買い上げ、ありがとうございます！す！」

紙袋に入れた商品を、お客さんの顔を笑って見上げながら両手で差し出す。

まだぼんやりとしていたお客さんは、そっところらに右手を伸ばして、紙袋を掴んだ。

（あ、手が……）

触れてしまった。もっと端っこを持っておけばよかったかな、と思いつつも彼の手が離れるのを待つ。だが、なかなか離れない。

「あの、お名前を――」

お客さんが私に、何事かを問いかけようとした瞬間。

【召集――召集――召集――召集――】

「きゃあっ！」

突然、前方から大きな音がした。

けたたましい音に驚いた私は慌てて耳を塞ぎ、すぐにハツとして商品に目を向ける。

よかった。きちんと彼が受け取ってくれたようで、商品は無事だ。

「あ……。すみません」

「あ、い、いえ……」

胸元からペンダントのようなものを取り出して何やら操作をしたお客さんが、音を止めた。

魔法の連絡端末だろうか。そんな高価なもの、初めて目にした。

「あの、ありがとうございます。……それでは」

「あ、は、はい。またのご来店、お待ちしております！」

何故だかガツクリと肩を落としてしまったお客さんを、深々と頭を下げて見送る。

きつと、お仕事の呼び出しだ。お仕事が嫌で落ち込んでしまったのだとしたら、是非うちのパンを食べて元気を出してもらいたい。

私は姿勢を正すと、カランカランとベルを鳴らして出ていったお客さんに、グツと握り拳を作ってエールを送った。

（そういえば、今の人もローブ姿だったな。見た目だけだと私に質の判別は無理だけど……連絡端末を持ってるくらいだし、お城勤めなのかな？）

なら、あの無口なお客さんと知り合いだったりする？と顎の下に指を当てて考える、私であった。

——翌日。

そろそろ夕方に差し掛かる時間帯に、ドアベルが鳴った。

そちらに顔を向ければ、例のお客さんが立っている。

「こんにちは、いらっしやいませ！」

この時間帯に来るなんて珍しいなと思いながら声をかけると、彼は鈍い動作で頷いた。

「……ども」

そして何故だか、カウンターこちらに真っ直ぐ歩いて来る。

フードを下ろさず、商品棚にも向かわず。鈍く光るグレーの瞳でこちらを見つめて、真っ直ぐに。

「……？」

いつもと違った様子に、私はどうしたのだろうかと首を傾げた。

彼が目前で立ち止まったことで空気が流れ、どこからか——いや、彼からか。焦げたような匂いが、漂ってきた。よく見ると、ローブの袖の部分が微かに焦げている、ような……？

「昨日、変な男が来ませんでしたか。金髪で、妙に顔の良い」
「ああ……！いらっしやいました！」

ウンウンと頷けば、お客さんはクシヤツと顔を歪めた。

やっぱり知り合いだったんだ！と予測が当たって胸を弾ませていた私は、彼の反応にキョトンと目を見開く。

「あいつ、とんでもない女たらしなので。絶対に、もう、関わらないでください」

「え？」

とても渋い顔をして告げられたのは、そんな予想外な言葉だった。そんな風に見えなかったけどな？と首を傾げると、ズイツと顔を寄

せられる。驚いて体を反射的に引くと、ガシリと左手を掴まれた。

「絶対に関わってはだめだ。危ないから。な？分かってくれ」

敬語の剥がれ落ちた低い声。ギリギリと締め付けられる手首。

仕事モードの無敵の仮面が、あっという間に剥がれてしまった。

キラキラと光っているグレーの瞳が怖い。

どうして。いつもは控え目で、無口で、優しいのに。

「あ、あの、いたい、です……」

涙目になっておずおずと顔を見上げると、ハッと目が見張られた。

「すっ！……すみません」

「あ、い、いえ……」

慌てて手を離されて、そっと右手で掴まれていた場所を押さえる。

見てみると、跡がついていることも、赤くはなっていることもな

かった。少し、反応が大袈裟過ぎたかもしれないと反省する。

「あの、これ。俺、魔法職に就いてて。それで、魔法が使えるので」
カウンターの上に置かれたのは、シンプルな装飾のネックレス。
金色のチェーンに、赤い宝石が一粒付いている。

きっと高価なものだろう。魔法を付与しているなら、尚更だ。

「え？ いや、あの、受け取れないですよ……」

私はギョツとして胸の前で両手を振り、首も横に振る。

名前も知らないお客さんから、宝飾品をいただくなんてとんでもない。そう思って遠慮をしているのだが、お客さんはめげずにグイグイきた。

「あの男、俺の同僚なんです。俺きっかけで、この店を知られてしまつて。そのお詫びみたいなものです。受け取ってください」

「で、でも……」

今のところおかしいことはされていないし、少し話ただけでは

あるが、昨日来たお客さんは穏やかでいい人。そんな印象があった。

よく知らないので勘違いである可能性はあるが、それを言うならこちらのお客さんが『彼が女たらしである』と思い込んでいる可能性だってある。

「俺、このパンが好きで。貴女がニコニコと笑って、これが美味しいですよとおすすめてくれる時間が好きなんです。ですから、ね？いつものお礼だと思って、どうか受け取ってください」

「うう、うー……っ」

更には受け取ってもらえなきや、捨てることになりますからと言われて。赤い宝石が、『もらって』と言わんばかりにキラリと光る。こんなに綺麗で可愛いネックレスが、捨てられてしまうなんて。そんなの、あんまりだ。

「そこまで、言うのなら……」

あまりにも彼が引かないから。とうとう私は、折れてしまった。

おずおずと手を伸ばし、冷たく硬質な質感のネックレスを手に取り。シャラリと鎖が鳴り、揺れた赤い宝石がまた、キラリと光った。

（綺麗——！）

お洒落とは縁遠いが、アクセサリーには心惹かれる。

遠慮はしていたが、本当は一目見た時から、素敵だと思っていた。嬉しい。これが私のものだなんて。

「後ろ、向いてもらえますか？ 着けますよ」

「あ、はいっ！ お願いしますっ」

途端に弾んだ声を出してしまつて、しまったと口を押さえる。

あんなに受け取れないと言っていたのに、自分のものになった途端に大喜びするなんて、いくらなんでも現金すぎる。

自己嫌悪に陥つてしよんぼりと肩を落とした私を見て、お客さん

は口許を緩めた。

そして早くと言うように、人差し指をクイクイと曲げて見せる。

「ん……」

彼に背を向けると、大きな手で髪を纏められ、横に流される。

首筋を指が掠め、チリツと肌が少し熱を持った。

続いてほんのりと頬が熱くなる。意識しては駄目と思えば思うほど、後ろに居る彼を意識してしまった。

「できましたよ」

「あ、ありがとうございます！」

クルリと前を向いて、お客さんの顔を見上げる。目を細めてこちらを見下ろす彼は、いつものようにじっと私のことを見つめていた。

「似合い、ますか？」

「……ええ、とっても。似合っています」

お礼を口にしながらも、何だか不思議な気持ちになる。

グレーの瞳の奥で、チラチラと炎が火の粉を散らしているように見える——ような。そんなことなど、あり得るはずがないのに。

熱いとすら感じるまでの視線を浴びせられて、私は何だか急に、居心地の悪さを感じた。

そわりと身動き、もじもじしながらもチラリと彼の顔を見上げる。

「——ああ、このままだと冷やかしくなるところでしたね。今日のおすすめはありますか？」

「あつ、ふふ、そうでしたね。今日のおすすめは——」

昨日と同じようにそろそろラインナップから消えそうなプラム製品をおすすめして。お客さんが帰られた後、私は少しの間だけお母さんに店番を変わってもらい、自室で鏡に映る自分を見つめた。

（素敵……）

赤い宝石が、キラリと胸元で光っている。

男性からこんなに素敵なプレゼントを貰ったのは、初めてのことだ。……まあ一応、これはお詫びの品であるのだけれど。

（思い返せば……変なものを送りつけられるばかりで、こんな正統派のプレゼントはもらったことがなかったな）

やたら変な人から好かれる私は、やたら変なプレゼントばかりもらうのだ。

（高価な魔法撮影機による隠し撮り写真や、臭い液体、はたまた血文字のラブレター……などなど）

心配をかけたくないので、それらをどうにか両親に気付かれないようにと、昔から隠れて処分している。

本当に、バレないようにするのは大変なのだ。受け取る身にもなっ
てほしい。それでいて後をつけられることもあるのだから、一生

独り身でいいと思ってしまいうのも無理もないだろう。
だって、おかしい男性ばかりに好かれるのだから。

（——なんていう、お名前なのかな）

きっと良い職に就いておられる方だから、好きになっただとしても身分違いの恋になってしまいうのだろうけれど。ほんのひととき、甘い気分に入るだけならバチは当たらないだろう。

「ふふ、また来てくれるかなあ」

小休憩を終えて店番に戻ると、母がニヤニヤしながら見てきた。
そんなんじゃないってばと応えながら、私ははたと気付く。

（そういえばこのネックレスには、どんな魔法がかけられているのかな？）

確認するのを、すっかり忘れていた。

今度来店してくださった時にでも、聞いてみようか。

3. どういつもこいつも

人通りの少ない路地を、私は半泣きでバタバタと駆けていた。

今日は定休日。ストレス発散を兼ねてブラブラとお散歩に出掛けたら、とんでもないことになってしまった。

住民が働きに出ているせいで、閑散としている住宅街。

そこで突然目の前にやってきた、中年男性。

もう暑い時期なのに、分厚いコートを着込んでいて。おかしい、と気付いた時には——バツとコートの前が開かれた。

思い出すのも悍ましい光景。ぶわ、と体に走った熱。

視界から何か魔法をかけられた——そう、本能で察した。

悲鳴を上げ、パニックに陥ったまま走り出して。それでも背後から聞こえてくる足音に、竦み上がる。

足を止めたら終わりだ。

そう自分を奮い立たせて、私は必死に走る。

（やだ、もうやだあ！どうして、こんなことばかりっ）

いつの間にこんな路地に入り込んだかも分からない。後ろから、まだ追いかける足音がしている。

こわい。必死に走りながら、胸元で光る赤い宝石を握り込む。

（たすけて、お客さん、助けて……！）

ボロボロと涙が零れては頬を伝って風に乗る、散っていく。

どんな魔法がこのネックレスにかけているのか、知らない。

あれから三日経つが、あのお客さんの来店はまだないのだ。

けれどもしかしたら、私の身を守ってくれるかもしれない。

私は必死に黒い髪にグレーの瞳をした彼の姿を、頭に思い浮かべていた。

無口だけど、いつも落ち着いている年上の男性。

高いところにある顔を見上げれば、いつもゆるりと目元を緩めてこちらを見てくれる。

名前も知らないお客さん。いつからか、次はいつ来てくれるのだろうかと考えるようになっていた。

彼に、助けてほしい――

そう願って、また新たな雫が頬から零れ落ちた瞬間。

――ドンッ

「……え？」

背後から爆発音がして、私は足を止めた。

反射的に振り返れば、二人の人影。

はためく黒いローブ。焼け焦げた匂い。爆風で脱げたフード。黒髪と金髪。その奥に見える、円形に大きく焦げた路地。煤にまみれ

ながら、気絶している変質者。

「はあっ、はあっ、はあっ、やり、すぎだ……！ 始末書、もんっ」
「いいから衛兵呼んでこい」

膝に手を置いてぜえはあと荒い呼吸を繰り返す金髪のお客さんと、
そんな彼をゲシリと蹴ってからこちらに向かってくる黒髪のお客さん。

「……あ」

来てくれた――

そう思いながら、私は膝から地面に崩れ落ちていく。

彼の顔を見るなり、強ばっていた体から力が抜けたのだ。

「おっと」

脱力した体を、逞しい腕で抱き留められた。

いつもの彼の香りと、ほんのりと焦げた匂いが混じっている。

そう言えばこないだも、こんな匂いがしたような。

「……大丈夫？　じゃ、ないか」

「あ、う……」

ありがとうございますと言おうとした口は、上手く言葉を紡げなかった。

体が、おかしい。熱くて、うずうずして、何だか息が苦しい。

ジクジクとする体の奥に苛まれ、私はそれを紛らわすためにスベスベの布地に頬擦りをした。

「可哀想に。でも大丈夫ですよ。俺がどうにかしますから」

「はあ、はあ、あ、うう……」

優しく抱き締められて、安心したからか更にクタツと体が脱力した。

頼りになる力強い腕の中で、私は荒い呼吸を繰り返し、苦痛に耐

えるように目を閉じる。

「え、うそ。ガスク、え？店員さんの前では、そんなに猫を被っているんですか？え、うそでしょ」

「ドリー、うるせえぞ。いいからさっさと動け」

どうやらお客さんの名前は、ガスクさんと言うらしい。

ガスクさんが動いたのを感じ、私は薄く目を開く。

すると彼は、今まで見たことがないほど険しい顔をして、ドリーと呼ばれた金髪のお客さんのことを睨み付けていた。

続いてドリーさんのことを見してみる。すると彼は、ダラダラと大量の汗を掻いてしゃがみこんでいた。

「そんなご無体な。詰め所からここまで、どれだけの距離があると思うんですか。それをこんなに短時間で飛んで、すぐに動けるとでも、ああ……」

「チッ」

ズシヤリ。ドリーさんは地面に座り込んでしまった。

（飛ぶって、なんだろう）

文字通りの意味ではきつとない。

でも恐らくは魔法のことだろうと、気が付いた。

「ああ、でも……店員さんの様子が、おかしいですね。少し休んだら諸々済ませるので、もう行ってください」

「……おう。頼んだ」

ミーチェさん。そう名前を呼ばれて、私は顔を上げた。

グレーの三白眼が、微かに揺れている。心配させてしまっている
と分かって、私は大丈夫と伝えるように笑った。

——笑った、つもりだ。きつとうまくは、笑えていなかったけれど。

痛ましげにこちらを見つめる彼を安心させたいのに、それが出来ない。歯痒い思いで、私は彼の着ているローブの生地を握り込んだ。「体が発熱していて、様子がおかしいように感じます。なので様子を見るため、場所を移動しますね」

「は、い……」

あれ。名前、教えたつけ――

遅れて脳裏に浮かんだ疑問が、体を蝕む熱で溶けていく。

逃げ惑っていた時に感じていた恐怖や不安を覆い尽くすような熱。それが体の芯からグズグズと溶かすように、全身に広がっている。頬に触れているスベスベとした布地の感触が冷たくて気持ちいい。

「ガスク、さん……?」

「はい」

横抱きにされて、運ばれながら。顔を見上げて、名前を呼んでみ

る。

こちらを見下ろす瞳が少しだけキョトンとして、どうしたのかと言外に問いかけてくれていた。

「名前……しれて、うれしい……」

「……っっ」

彼の着ているローブを握って、そっと滑らかな生地顔を埋める。薬草のようなにおいと、洗剤のかおり。深く吸い込むと、焦げたような匂いは感じない。

詰所って、やっぱりお城かな。ドリーさんとは、思ってたより仲が良さそう。

色んな思考が混ざり合い、ふんわりと霞んで。熱くて、揺れて、ガスクさん。

「かわい、すぎだろ……」

苦し気な声で呟かれた言葉が右から左に流れていって。私は横抱きのままぎゅっと体を抱き締められると、こめかみに柔らかな感触を押し当てられた。

* * *

もぞもぞと布擦れの音が聞こえて、体の熱さが少しだけ薄れる。頬や瞼、額に鼻の先。あちこちに柔らかな感触が触れ、素肌である太ももが、熱いものでねっとり撫でられていた。

「ミーチェ、可愛い。すっげー可愛い」

「ん、ん……」

うつすらと目を開ければ、お客さん……じゃなくて。ガスクさんの鋭いけれど、整った顔立ちが見えた。

最初は怖いと思った目付きも、今はこわくない。

ピンチに駆けつけてくれた、頼りになる素敵なお男性。

「かわい。マジで天使だな。口もちっこい。な、キスしていい？」

「ん、きす……？」

キスと言われて、私は彼の薄い唇を見つめた。

そして『ガスクさんと出来るの？』と首を傾げる。

上手く働かない頭でどうにか考えようとして——出来なくて。それでもキスはしたかったから、うんと頷く。

ほんのりと頬が、熱かった。

「マジ？ いいんだ？……じゃ、遠慮なく」

「ん、む」

近かった顔が、もっと近付いて。何度も顔に触れていた柔らかな感触が、唇を塞いだ。

ぶわ、と体温が上がる。

私は今は、ガスクさんとキスをしているのだ。

そう考えると、ジワジワと足元から這い上がって来る感情がある。

これは羞恥か、歓喜か、それとも――

ドキドキしながらうつつすらと目を開けてみると、黒い睫毛が見えた。

「ん、ん、ふ……っ」

「ん……」

角度を変えて何度も唇を押し当てられ、時折ちゅうっと吸われる。ずっと鼓動が駆けていて、じわじわと目に涙が溜まっていた。やっぱりすごくすごく、嬉しくて。

今になって私は、この人のことが好きだったのだと気が付いた。

「……嫌？」

「あ……」

彼の唇が離れていったと思ったら、涙の理由を問いかけられた。私はもっと口付けてほしくて。私の上に覆い被さっている彼の首に腕を絡めて、その大きな体をそっと抱き寄せた。

「嫌じゃないの。やめないで……」

「……っ」

息を飲んで、ゴクリと喉を鳴らした。

そんなガスクさんが、再び顔を寄せてきてくれる。

「んあ、あ……っ」

「ふ、ん……」

唇を重ね合い、舐め合いながら。私は太ももを撫でられて、足のあわいもたまに、そろりと指先で擦られていた。

その、奥が——どうしようもなく疼いて、苦しい。

ぐちゃぐちゃにしてほしいとすら思ってしまったている。

他の誰でもなくガスクさんに、暴いてほしいのだ。

私は一体、どうしてしまったのだろう。

あの時、ガスクさんが助けに来てくれたから。私は、ガスクさんの事しか考えられなくなってしまった。

もっと近くに、もっともっと。そう望んで、私は彼の体を強く抱き締める。

「ガスクさん、ガスクさん……」

「大丈夫だ。俺はここにいる」

低く、優しい声を聞いて、いつの間にか不安にかられていた心に光が差した。

よかった、傍にいてくれている。これで怖いことは、何もない。

単純だが気持ちが悪く落ち着いた私は、鼻からゆっくりと息を吐き出

した。

「かーわいー……。マジでかわいい。何してても可愛いな、あんた」
「……？」

今更ながら普段と口調が違うなと気づき、私は首を傾げた。

思っていたより野性味溢れる感じではあるが、それでも素敵だなと胸が高鳴る。きつと、こっちが素なのだろう。

「ミーチェ、今あんたには変態のせいで、発情する魔法がかけられてる。てっとり早く、且つ後遺症が残らない安全な解除方法は異性と交わることだ。……俺が相手でもいいか？」

「ガスクさんと、交わる……」

そうだと肯定する声に、頭が真っ白になった。

しかし目を開けて仰向けに寝転がる自分の体を見下ろせば、既に全裸になっている。

そして合わせた太ももには、彼の手が触れていた。

その手で体を暴かれ、征服されるのだと考えて——私は体の奥を、キュンと切なく疼かせてしまった。

嫌だなんて、微塵も思わない。

きつと身分違いの恋だけど、思い出になるならそれでもいい。でも、ひとつだけ問題がある。

「するなら、ガスクさんがいい。けど……私、経験がないから。うまく、できないかも」

おずおずと見上げた両目が、ゆっくりと見開かれていった。

まん丸になった瞳が、じっと私を見ている。

触れている肌がグングンと熱を上げていき、互いの体からじわりと汗が吹き出した。

「……っ、はあ……」

ぐっと息を飲んで、落ち着けるようにゆっくりと息を吐く。

そんなガスクさんを前に、私は呆れられたかもなどと、不安に思うことはなかった。

だって、顔を背けている彼の耳が赤いのだ。

「何も問題はない。全て、俺に任せろ。変態魔法のせいで、きつと痛みも無いはずだ」

「そっか……」

彼の敬語が剥がれたからか、私の方も砕けた話し方になってしまった。

目上の方に失礼だったかな、などと冷静な思考が沸き上がることもなく。私は目を閉じて、彼に身を任せた。

「避妊魔法はもうかけてある。だから、安心してくれ」

「ん……」

そろりと促されて、羞恥に苛まれながらも足を開く。

体を起こした彼は私の開いた足の間に座り、陣取った。

「触れるぞ」

「う、うん……」

断りを入れてから、彼は私の足の中心へと左手を伸ばす。

大きな手だ。思えば仕事の中に、チラチラと見てしまっていた。

ゴツゴツしていて、格好いい手。

「あ……っ！」

くちゅりと音を立てて、足の間の割れ目を撫でられた。

あまりの濡れ様にもしかしたら粗相もしてしまったのではと焦るが、どんどんと生まれる刺激に思考が流される。

くちゅくちゅと鳴る音が、お腹を更に切なくさせた。

「怖いか？」

「うん……」

大丈夫と首を横に振れば、上体を前に倒した彼が、私のお腹に口付ける。

くちゅくちゅ。陰唇を撫で、入り口を擦る指先。

淡い快樂がどんどんと生じ、お腹の奥へと蓄積していった。

優しくしてくれて嬉しい。でも、優しいからこそ不安になる。

「い、嫌じゃ、ない？」

「ん……？何がだ？」

秘すべき場所をじっと見つめているグレーの瞳を、見ないようにして。吃りながらも問いかければ、チラリとこちらを見上げる気配があった。

「そんなとこ、触るの……嫌じゃ、ない？」

「……ははっ、まさか」

一瞬の間の後に、嘔き出すようにして笑ったガスクさん。そんな彼は、カラツとした様子で否定した。

私だって、いい年だ。男女の営みで、この場所を使うことを知っている。

けれど排泄に使う場所がすぐ傍にあるし、月経の時は血を流す場所でもある。だから嫌ではないかと心配をしたのだが――

「めちゃくちゃ興奮する」

こちらを見上げたままの彼は、口角を上げて妖しく笑った。

それを横目でバツチリと見てしまった私は、かあっと全身の血を滾らせる。

「何だったら、口でだって出来るけど。証明してみせようか？」

「……えっ？」

思考の鈍い今の私には、上手く理解ができなかった。

口で、とは……？とぼんやりと首を傾げていれば。

見下ろした先で、彼の顔が足のあわいに近付いてくる。

「小粒で、可愛いな……ん」

「あ、あ……っ!？」

ぬるん、と柔らかく湿ったものが——秘裂のすぐ上にある敏感な突起を、撫でた。

突如ビリビリとした刺激が生まれ、私は腰を戦慄かせる。

「ひゃ、あ、ああ……っ♡なに、なに、これ……っ」

「……っは、かわい……♡」

ぬるぬると上下に擦る感触が、突き抜けるような鋭い衝撃を生む。私は目を白黒させながら咄嗟に彼の髪を握り込み、ハクハクと唇を震わせた。硬くてコシのある髪の手触りがよかったが——すぐにも良くなる。

「ふ、ちっこいのに……頑張って硬くなってる」

「きゃ、あ……っ！んんっ♡ン、んう♡」

繰り返し、繰り返し。にゆぐにゆぐとそこにある突起物を弄られて、たまにちゅうっ♡と音を立てて吸われる。

トロトロと愛液を溢す入り口は、優しく指で撫でられていた。

「ミーチェ、すっげー可愛い。愛液、あま……♡」

「あんっ！あっ、あっ♡ふ、んん……っ♡」

クリクリと突起を舌先で弄くられたと思えば、潤んだ蜜口をゾゾツと啜られる。すると今度はまた舌先で突起をクリクリと弄られて、ペロペロと優しく舐められるのだ。

「あああっ♡あっ♡ひ、あっ♡」

念入りに舌で転がした後はちゅうっ♡と唇で吸って、じゅるじゅるとしゃぶる。かと思えば尖らせた舌先でピンピンと弾いて、ドロ

ドロになった入り口を指先でくちゆくちゆと撫でた。

「ぷっくりクリトリス、かわいいなあ♡」

「あっ、あっ♡あ、それ、やっ♡」

指の腹でタシタシと叩かれて見悶えれば、また舌でぬろぬろと舐められて。続いて皮に隠れた芯を抉るように、舌尖でゴリゴリと擦られる。

そうして口や指で愛でられている内に更に体がグズグズに蕩けて。私はもう、まともな思考が働かなくなってしまった。

「ちっこいクリトリス舐めながら、指、入れるからな」

「ふあっ♡あ……っ!? んん……っ!」

まず一本、と掠れた声が聞こえて。入り口に突き立てられたものが、隘路を割り開いて入り込んでくる。

しかしその合間にも、突起はペロペロクリクリと刺激されていた。

「あっ！ ああっ♡はいっ、て♡なにか、あっ♡♡」

「はー……っ、あっ……♡これが、ミーチェの中……」

細長いものが、ぬぐぬぐと中で前後する。

突起から彼の口が離れたことに、ホッするような、残念なような。複雑な心境の最中、角度を変えて指が突き入れられ、内壁を隅々まで撫でていく。

「あっ、んっ！ や、あっ♡なか、すごい……っ♡」

「ん、気持ちがいいな。ゆっくりなでしてやるからな」

くちゆくちゆと音を立てて。初な蜜道を押し広げながら、ガスクさんは指を動かす。

不慣れな挿入なのに痛みは無く、ただただ気持ちがよかった。

「こっちも、また……」

「は、ああっ！ あんっっ♡♡んっ、んっ！」

止んでいた突起への刺激が再開され、私は敏感な場所を舌先で弄られながら、尚も膣内を探られる。

ちゅるんと唇でそこを吸われる度、面白いくらいに腰が跳ねた。

「や、や……っ♡そこ、あついの……っ！」

丁寧に丁寧に舌を這わされ、包皮の中すらもぬるりと舐められる。確か、彼はここをクリトリスと言っていたか。

通り過ぎた筈の彼の声に戻ってきて、私はこの場所の名称を知る。

「とけちゃ、んんっ！」

「……っふ♡」

しつこくしつこく愛でられて硬く凝ったその場所を、尖らせた舌先でグリグリと潰される。

途端に強くなった悦楽に、私は視界を白く霞ませた。

それでもグリグリは止まず、執拗に責められる。

「なか、キツ……♡ん、んぢゅっ♡ふ、ん……♡」

「あッ！ああッ！ひっ、うん……ッ♡♡おッ♡♡」

今や私は、抜き差しされる指でごりゅごりゅと内壁を抉られ、クリトリスに夢中でむしゃぶりつかれていた。

敏感な突起が唇に吸い付かれ、引き伸ばされ、ちゅぽんっ♡と解放されて。舌先で執拗に弾かれ、潰される。そうしている内に膣内がキュウキュウと締まり、指で奥まで丁寧に撫で回され——様々な刺激が集約する体が、ガクガクと痙攣し出した。

「あああ、あー……っ！なか、そと、すごいっ♡んん、ふあ……！やら、なんかくるうつ♡」

「ん、いって……？」

じゅぽじゅぽと指を出し入れされて、お腹の奥がキュンキュンと甘く痺れている。

奥歯で優しく噛まれるクリトリスが、にゅぐ、にゅぶっ♡と滑つては拘束から逃れ、また痛まない程度に噛み締められていく。

「んい、い、ううゝゝゝッ♡♡♡」

「っ、ん♡んんゝ♡♡」

パチンと弾けた熱。

それでもグリグリと潰され、擦られるクリトリス。

目前で光の粒が弾け、脳天には電流が駆け抜ける。

「ははっ♡♡上手にできました♡」

「お、おッ♡♡♡」

褒め言葉の後に、ぢゅうつ♡とキツくクリトリスを吸われて。あまりの衝撃に、ピュッ♡と何かが吹き出る。

「おっと潮だ♡ハジメテで吹けるなんて、ミーチェはえらいなゝ♡んーっ♡♡」

「ヒッ、あゝあゝあゝッ!？」

中の指が、二本に増えて。ごりゅごりゅと容赦無く肉ひだを抉られながら——クリトリスがめちやくちやに、舐め回されている。

絶頂の余韻が消え去る前で敏感になっている体は、耐えきれなくて。ビクビクと痙攣しながら、二度三度と絶頂を繰り返していった。

「あーもう、可愛い。すげー好き。もう、運命だろ。なあ、俺と結婚しよう？ 絶対、幸せにするから」

「あんっ♡あゝっ、あうっ♡やだ、も、あうう……っ♡」

何事かをつらつらと語られる合間に恥丘に口付けられ、指で絶えず中を擦られる。

爪を短く切った指先が時折カリカリと奥の行き止まりを搔き、私はその度にガクガクと腰を震わせた。

「そうしたら一生、俺が守ってやるから」

「ふああ……！そこ、あっ！だめえ……っ♡」

浅いところをお腹側にゴリゴリされて、頭の中が真っ白になった。イヤイヤとかぶりを振っても、意味は無くて。絶えずずっと、弱いところを責められている。

「今、あんま触れてこなかった守護系の魔法を急ピッチで研究してるから。安定するようになったら、順次重ねがけしてやるな」

「うんん………！」

話し終えるなり再び、クリトリスに口付けられて。ちゅるんと吸われ、ペロペロくちゅくちゅと舐めしゃぶられる。

「きや、うん………っ！」

「そうしたらもう、あんたを狙う変態達はあるに害をなそうと考えるだけで弾かれるはずだ。安心だろ？」

ちゅぷんと音を立ててクリトリスを解放され、また語りかけられ

る。膣内はバラバラに動く二本の指が掻き混ぜ、多量に分泌された蜜を攪拌していた。

「……指、また増やすぞ。三本に慣れたら……俺のを挿れるからな」
「あっ、あっ、がすく、さん……っ♡のおっ♡」

現金な私の脳みそは、彼のものを挿れてもらえるという情報だけは、聞き逃さなかった。

挿れてもらえと思っただけで、そこがキュンッ♡と締まる。

それにガスクさんは低く笑い、宥めるかのように内壁を撫でた。

「あ、おっ♡はっ、はっ♡」

ずるりと抜けていった指の束が、太さを増して入り口に当てられる。ぬるぬると擦るその感触は、彼の言った通り三本に増えているのだろう。

啞えようとヒクつく蜜口を攪り、やがてググツと圧が加えられた。

「あッ、おっき……♡」

「俺のは、もっともつとでかいぜ」

「あ、……っ♡♡」

ゆっくりと押し入ってくる指の束は、膣内を満たすには十分なのに。彼のものは、もつと凄いと言うのか。

「それに、うんと長い」

「……あっ♡ん、ああ……っ♡」

そんなものを入れられてしまうと、私はどうなってしまうのだろう。お腹の奥の奥まで串刺しにされて、駄目になってしまうかもしれない。

——でも、それでもいいと思った。

体の一番奥まで征服されて、めちゃくちゃにされたい。

ぐちゃぐちゃのドロドロにして、駄目にしてほしい。

際限無く被虐的な欲求が沸き上がり、私はお腹の中をトロトロと濡らしていった。

「やーらしいな。俺のちんぽのことを想像しながら、俺の指しゃぶってる」

「あっ♡あっ♡アッ！なか、なか、とけちゃっ♡♡」

慎重に動いていた指が、段々と大胆に前後をし始めて。ズリズリと内壁を擦られ、ゴリゴリと浅いところにある泣き所を抉られながら――私は身悶え、嬌声を上げる。

「もう十分とけてるよ。ドロドロに、な……」

「ふあっ♡あっ、んんっ！」

彼の顔が、また寄せられて。ちゅくっ♡と舐めれたことを皮切りに、クリトリスが再び苛められる。

膣内は三本の指でしつこく撫でられ、拡げられていた。

ぐちよぐちよと粘ついた音が、自分の股の間から際限無く聞こえてくる。

「Gスポットも、めちゃくちや腫れて……これは、魔法のせい？それとも、ミーチエが淫乱だから？」

「わか、あっ♡わかりやな、あっあっ！」

何だか甘く詰られたような気がしたが、彼の声は右から左に流れていった。

聞く気が無いわけじゃない。思考に靄がかかっていて、快樂のことしか考えられないのだ。

これも、おかしい魔法のせいだろうか。

チラッとそう考えていたが、ぢゅるるっ♡と強くクリトリスを吸われて、また気持ちいいしか考えられなくなった。

「おっ♡おっ♡お、あっ♡」

Gスポットと呼ばれた場所をしつこく指でゴリゴリされながら、ぺちャクチャとクリトリスを舐め回される。

クイツとクリトリスの上の皮膚を引っ張られれば、皮かむりの芽がちよこんと顔を出して。赤い芯にねっとり、舌を絡められた。

「お……ッ！お、おッ♡♡」

剥き出しの神経に、絡み付く感触。

ビクビクと痙攣する体を上から体重をかけて押さえ込まれ、私は過敏に反応する場所を中も外も、ひたすらに責められた。

「あああ……っ♡あ、おおッ♡♡ふ、んんッ♡♡」

にゆるにゆるにゆる。ぺちャぺちャ♡ぢゆるるるっ♡

飽きること無く延々と、ズル剥けのクリトリスが大きな口で愛でられる。時折カリッ♡と前歯で噛まれれば、私は口を開けて放心した。

「ひ、あああっ！あーっ！あっ、ああっ！」

ぐぢゅぐぢゅぐぢゅ。ごりゅっ、ぐりゅうっ♡タシ、タシ♡

クリトリスを苛める最中にもガスクさんは膣内を容赦無く責め立て、分泌された愛液を泡立てていく。

手首を捻って隅々まで撫で抉っていく動きは巧みで、経験豊富というよりは、少しずつ理解して的確な動作を算出しているようだった。いい反応をした場所は逃さず、繰り返し刺激する。

「もっ、もおっ、らめえ……！」

「ん……」

ちゅぷんと音を立てて。唇で引っ張られたクリトリスが離される。衝撃に大きく喘ぎ、背を反らす。そんな私は、ビリビリジンジンとした余韻に切ない声を上げた。

「イクッて言って、達するんだ。わかったな？」

「んっ！んっ！」

相も変わらずぐちよぐちよと膣内を掻き混ぜられながら。私は必死に頷き、カクカクと腰を前後に揺らした。

「ほ、おおっ♡♡♡」

するとご褒美だと言わんばかりにまた、クリトリスを口に含まれる。そうして皮を剥かれたままのそこを、徹底的に舐め回され、潰され、転がされていった。

「ひっ、イツ、ぐっ♡♡♡」

容赦無くいたぶられるクリトリスと、グズグズに蕩けているのに更に耕され、駄目にされる蜜道。

私は柔らかなものに後頭部を擦り付け、腰を反らして宙に浮いている爪先をピンと伸ばした。

「イクッ！イクッ、イツ、くう~~~~っ!! お、おおっ♡♡♡」

パチン。泡が弾けて——続いて濁流のような衝撃が押し寄せてくる。

ただでさえまともな動きをしていなかった思考は完全に停止。未だ止まらない責め苦に、体だけが敏感に反応してパチンパチンといとも簡単に、泡を弾けさせていった。

「——っ?? おっ? ひぐっ——えあ……」

あっさりど、連続で。絶頂を重ねるくせに、えげつないほどの衝撃が押し寄せてくる。

視界は明滅し、足のあわいからはびゆくびゆくと粗相をした。

それでも、私を追い込む動きは止まらない。幾重にも、重なる絶頂。かふ、と口から息が漏れて。シヨワシヨワと失禁しながらも、私はにへらと笑っていた。

それからぐると眼球を上向けて、一段と深い悦楽に堕ちる。

「いくっ♡イクのおっ♡イグ、イグうっ♡♡♡」

「ふ、ん……♡んぢゅっ♡ずぞぞっ♡」

最早ぐちゅぐちゅどころか、狭い——狭かった穴からは、ぼぢゅぼぢゅと酷い音が鳴っていた。

泡立ち、十二分に愛でられて。掻き出された体液がお尻に垂れていく。

「ああ、あ、んああ♡♡い、ぐう♡♡」

「ふーっ♡ん、ぢゅっ♡ふーっ♡」

隅々まで丁寧に磨かれたせいで、どこもかしこも肉ひだはプリプリの艶々。

彼の指をモグモグと美味しそうに食んでは、絶頂に震えていた。潤み切った穴の周辺に時折にゆるりと柔らかな感触が這い、私が溢した様々な体液を舐め取っていく。

「おぐッ♡お、えあゝゝっ♡♡」

今度は皮を剥かれた芯が、彼の前歯でグニグニと噛まれ始めた。
絶妙な力加減で痛みは無く、ただひたすらに気持ちがいい。

「ん……♡ん、ん……」

「おッ！おーッ！おおおおッ♡♡♡」

その上で噛まれてもギンギンに勃ち上がっている場所を舌先でしつこく弾かれて、ぶしやりとまた何かを吹く。

「こりこりひてて、おいひ……♡」

「おッ！おッ!!あ、ひいっ♡♡♡」

噛まれてジンジンしているぽってりと腫れた淫芽を、今度はそつと舌で掬い上げて。ガスクさんはそこを、器用にコロコロと転がす。

「いぎッ——」

またしてもブシュッ♡と透明な液体を吹いた私は、シーツを握り

締めて全力で体を仰け反らせていた。上に逃げる腰を追いかけ、彼の指はお腹側の壁をゴリゴリとこそぐ。

「おぎゅッ！ひ、いッ♡♡お、あぁ……！」

コリコリ、ちゆるちゆる、コロコロ。

達しても達しても、彼の口はクリトリスから離れない。

捲れた皮は指で固定され、剥き出しの芯は隅々まで丁寧に舐め回されていた。

「おおおッ♡お、あぁあッ！」

ぬぷぬぷ、ぐちゃぐちゃと音を立てて膣内を掻き混ぜる三本の指。どこもかしこも気持ちいいが過ぎて、私はもう「イク」とすら言えない。

「ふっ、ビクビクしてて、可愛いクリトリス……♡また、カミカミしてやるなあ♡ん……♡」

「お、えう……っ！」

むにい、とガチガチに硬くなっている芯に、硬い感触がめり込む。彼の前歯だ。そのまま先端から根本まで、ハミハミと噛みながら進んでいく。

「えぶ——お、あ、……イツ！ひ、あお……っ」

入り口の形が変わるほど、容赦なく膣内を攪拌されながら。私はしつこくしつこく、クリトリスに噛み付かれる。

「ミーチェ、イク時は？」

「お、お、お……っ♡♡♡」

叱るようにググ、っと強めに奥歯でそこを噛まれても。

馬鹿になった体はぶしゃっ！びしゃっ！と透明の液体を吹きながら、絶頂を重ねるだけ。

「イク時は、イクって言わなきゃだろ？」

「いゝおゝおッ!?! おゝおおっ♡♡♡♡」

親指と人差し指でぷちゅり♡とガチガチのクリトリスを潰され、私は舌を突き出してまた法悦を極めた。

カクカクと腰が前後に揺れ、ぬるぬると摘ままれたクリトリスが擦れる。

「おッ♡おッ♡ぎもぢっ♡おおっ♡」

「おいおい、人の指で勝手にオナニーしてんなよ♡」

笑ったガスクさんは、口調こそは冷たかったが、声色は優しかった。本気でやめろと言っているわけではなさそうだ。

「クリチンポ、シコシコして気持ちいいか？ そうだ、そんなにここを扱くのが好きなら肥大化させる魔法でも開発してやろうか。それで、まんこをズコズコしながら手ででっかいクリチンポをシコシコしてやるよ」

「……っ♡♡♡」

手で握れるほどまでに育ったクリトリス。そしてそれを、彼に扱かれ、犯される――

私はそれを想像して、きゅんと彼の指を締め付けた。

「はは、その時が楽しみたいだな。なるべく早く実現してやるから、待っててな」

「んお、おおッ♡」

再び彼の顔が足のあわいに近づき、根本を押さえて固定されたズル剥けのクリトリスがねちよねちよと舐め回される。

「お、イク……っ♡」

その裏側を、中からゴリゴリされているせいもあるのだろう。

私はすぐに達してしまい、またしてもいきながらクリトリスを責められる。

気持ちいいが終わらない。それでも私の体は、ただひたすらに歓喜していた。

——そしてそれから、小一時間ほど経って。

ほとんど無言で私の性感帯を責め続けたガスクさんが、やっと顔を上げた。

「——そろそろ、いいか」

「……おおんっ♡♡」

ずるり、と勢い良く抜けた指。

その衝撃で、馬鹿になった尿道がピュッ♡と透明な液体を吹いた。

「おお、おっ……♡お、お……♡」

最後にぢゅっ♡と強くクリトリスを吸ってから、ガスクさんはクリトリスから顔を離した。

寝台の上を這い上がってきた彼の体が、私の上に影を落としても。

私はひっくり返った蛙のような体勢で、重い重い絶頂の余韻に浸っていた。

数えきれないくらい、連続で達したから。その余韻でまた達して、ぴゅくっ♡と透明な液体を吹く。

「ミーチェ、そろそろ挿れるぞ」

「おおっ♡♡はあっ、はあ……♡あっ、ん……？」

ピタリと熱いものが、入り口に押し当てられた。

でも、よく分らない。ただただ、気持ちがいい。

それでも刺激を失った体が、早く早くと次の刺激を求めている。

「——ああ、そうだ。なあ」

ガスクさんの声がした気がしたが、よく分らない。

体の内側では絶えず衝動がうねり、暴れまわっている。

上下にぬるぬると割れ目を熱いもので擦られるのが、気持ちがい

い。けれど——物足りない。

「俺が最初の相手で、最後の相手だ。そう、約束してくれるか？」

「う、んっ、ん……？」

何かを問いかけられたが、正常に働かない思考では理解が出来ない。体の内側に侵食した魔法が、精を求めて叫び、暴れている。

「な、約束。してくれるよな？」

「あ、う、うん……」

約束……と。それだけは分かったので、よくは分からなかったが頷いた。

するといつの間にか目前に迫っていた彼の顔面で、笑顔が弾けた。

「そうか。じゃああんたが体を重ねるのは、生涯で俺とだけ。だから俺が、最初で最後の相手だ。そう誓ってくれるんだな」

「う？う、うん……」

話の内容はサッパリ理解できなかったが、同意を求められていることだけは分かった。

だからまた、頷いたのだが——再び破顔したガスクさんが私の下腹部に手を当てたことで、大きな衝撃が走った。

「あうう……!? あづ、あ、あ」

お腹が——子宮が。燃えるように熱い。全身からドツと冷や汗が吹き出して、私はブルブルと体を震わせた。

「悪いな。すぐ終わるから、少しだけ耐えてくれ」

「うう、う、うー……っ」

熱い。熱い。それだけを考えて、私はガスクさんの体に擦り寄った。そしてとっても辛いのと、甘えるのだ。

優しく頭や肩を撫でて宥められ——そうしている内にやがて、熱が消える。

「できた。ほら、見てみる」

「あ、う……？」

涙に濡れた目尻を、ペロリと舐められて。視線で促された先を見てみれば、ぼんやりと淡く発光している、蛍光ピンク。

下腹部——子宮の上部分にあたる皮膚に浮かんだ、ハートの紋様。

「あに……？」

「貞操の誓いだ。これでもう俺以外、あんたの中に入ることはできない。劣情を抱いていたら、触れることだって無理だ」

よくわからなくて混乱する私を置いて、ガスクさんはそうだと明るい声を上げた。

「……はっ、見てろ、ミーチェ」

「……？」

また見ろと促されて、視線を下に向ければ。根本を握られた恐ろ

しく大きな肉杭が、視界に入った。

それにドツキンと鼓動を跳ねさせていると、彼の苦しそうな吐息が聞こえてくる。慌てて視線を上げれば、ガスクさんは眉根を寄せ、苦悶の表情を顔に浮かべていた。

「あ、づづ。確かにこれは、なかなか辛いな」

「なに、してるの……？ガスクさん、つらそう……」

辛そうな彼を、助けてあげたくて。私はペタペタと彼の頬に触れ、よしよしと肩を撫でた。

「はっ、ふー……ありがとうな。終わったよ」

「ん……あれ？」

頬を撫でられて目を細めたが、目を開けた瞬間にチラリと視界の端に映るものがあつた。

少しだけ萎んだ肉杭の、根本部分をグルリと囲む蛍光ピンク。

私の下腹部に浮かぶものと似通った点がある、ような。

「これも、貞操の誓いだ。誓った相手以外にこれを使おうとしたら、ここでスパンと切れる」

「え……？」

すぱんと……？と繰り返し、私はぶるりと震えた。

想像、してしまったのだ。

それがそこで切断されて、断面を見せるところを。

「なに、わかんない……」

それに私は今、碌に考えられない。なのにガスクさんは、難しいことばかりを言う。

私はそれが嫌になって、グズグズと鼻を鳴らして泣いた。

「はは、ごめんな。もう、難しい話は止めにするから」

「ん……もう、しないで」

しつとりと汗に濡れた胸板にペツタリと頬をくつつけて、私は拗ねた声を上げた。

そんな私を彼は優しく抱き締めてくれて、入り口をぬりゆぬりゆと熱くて硬いもので撫でてくれる。

「はあ、まじで可愛い。体がちっこければ、穴もちっこい。大丈夫だとは思うけど、痛かった言うんたぞ」

私は再び覆い被さってきた彼に右頬へちゅつと口付けられて、ぽつと頬が熱くなった。

間近に迫ったグレーの瞳が、優しい色を湛えている。

「うん……」

ガスクさんがかなり大きいから、女の子だった大抵がちっこいとは思っただけど。私は可愛いと言われるのが嬉しくて、そつと口を噤んだ。

初体験は、痛むと聞く。だから怖くはあったが、止めてほしくなかった。

私は彼の背中に手を回し、大きな体をそっと引き寄せた。

「挿れるぞ」

「うん、きて……」

鼻先、額、頬。挿れると言った彼は、私の顔中にキスをして。それからググツと、入り口に熱塊を押し付けた。

「あ……っ、あッ、あっ！」

指で広げられた場所を割り開いて、入り込んでくる熱い感触。

今のところ痛みはないが、体の内側から押し寄せる感覚が大きい。怖くなった私は彼の体を抱き締めて、意外と厚い胸板にスリスリと頬を擦り付けた。

「うっ、可愛い……はあっ、く……っ」

「あっ、ああっ♡は、あんっ♡」

ずりゆずりゆと、浅いところを大きなもので擦られて。ゾワゾワとした感覚が背筋を通り、脳へと昇っていく。

（苦しいのに——気持ちがいい）

ちゅっと唇に口付けられ、頭を撫でられながら。少しずつ奥を目指していく怒張を、頑張って受け止める。

圧迫感が凄いのに、私は確かに感じていた。

「かわいい、かわいい。まじで、可愛い。好きだ……」

「あ、あっ！ガスク、さん……っ」

好きだと言われて、キュンと締まったところを少し深めに穿たれた。それでも私の体は彼のものを喜んで受け入れて、痛みも感じずきゅうきゅうと抱き締める。

「わ、私もっ、好き……！」

「な、……あ、うっ♡」

ビクンツと跳ねた彼の体と、中に埋まっている肉杭。

ただでさえ大きかったそれが更に膨れ上がり、ミチミチと内側から私の中を押し拡げる。

「……はは。これで晴れて、恋人同士だな♡」

「う、うん……♡」

少し照れたように笑って、額同士を擦り合わせてくる彼がなんだか可愛い。私は口元を緩めて、間近にあるグレーの瞳を見つめた。

「あっ、あっ♡……アッ!？」

「ん？ ああ……♡」

やがて、少しずつ大胆に前後するようになっていった怒張が、ずぐんと深いところを突いた。

それによってこれまで微塵も感じていなかった痛みが、何かが破

れるような衝撃と共に、お腹の中に広がった。

「あう、あ、いたい……」

「ああ、ごめんな。こればかり、はな……♡」

「ひうう……っ」

痛む箇所を優しくぬるぬると擦られて、痛みと快楽が入り交じる。じんわりと滲んだ涙は、彼の唇で吸われてしまった。

「痛くしてごめんな。そうだここ、Gスポット。ゴリゴリして、紛らわせてやるから」

「あえ……？ ああッ!? あッ♡んああっ♡♡」

ずるんと抜けていった熱塊が、張り出した先端で浅いところをゴリゴリと抉る。

ぬぷぬぷ。ごりゅごりゅ。前後する動きをしつこく繰り返されて、私の体の奥には、熱が蓄積していった。

「おっ♡お、あっ！ああっ！ふ、んんっ♡」

「ん。気持ちいいな♡ここを擦ると、濡れやすいらしいぞ。っ、人
体って不思議だよな」

まるで医者か研究者のような事を口にしながら、ガスクさんは私
の体でその説を確かめようとしている。

ずちゅずちゅと同じ場所を擦られて、勝手に腰が戦慄いた。

「あああッ！あーっ♡も、そこいやあっ♡」

「なんで？気持ちがいいだろ？」

息を乱しながらも、余裕な態度で。ガスクさんはしつこくしつこ
く、Gスポットと呼ばれた場所を擦る。

大きなものに、ぞりゅぞりゅと。ひたすら擦られているそこから
重く甘ったるい快樂が生じ、お腹の奥にどんどんと溜まっていつ
いった。

それが気持ちよくて、辛くて。止めてほしいと言ったのに、ガスさんは止めてはくれない。

「やらっ、てっ♡いって、るっ♡のにい♡おおっ♡♡おっ♡♡」
擦られれば擦られるほど、水音が激しくなっていく。

勢い余って深く入り込んだ時など、得に酷い。

じゅぶっ♡と一際大きな音が鳴って。感覚だけではなく音でも、私は自分の中がドロドロに蕩けていると、知らしめられた。

「あー、すご。中、めちゃくちゃ濡れてる」

「くくくっ」

その上、恍惚とした表情をしたガスさんが、そんなことを言うから。羞恥で顔を赤く染めた私は、両手で顔を隠した。

「かーわい♡でも、そんな隙だらけだと……」

「あ、う……?」